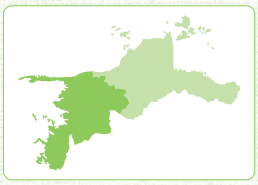
ふるさとじまん

わたしのお気に入り

愛媛県からの“ふるさとじまん”をご紹介させていただきます。愛媛県は北東部の東予地方，南西の南予地方その間の中予地方，という３つの地方に分かれています。今回は３つの地方からそれぞれのじまんを集めてみました。



まずは南予地方の大洲市，兵藤正昌先生（平成11年卒）です。

愛媛県

道後温泉と蜜柑だけじゃないけんね

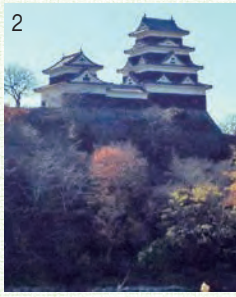
南予からは，伊予の小京都と呼ばれる大洲市を紹介します。

大洲市は人口約４万1,000人。愛媛県の西部に位置し，１級河川肱川が中央を流れ，流域に沿って田畑や集落，市街地が形成され中央部には大洲盆地が開け，西部は瀬戸内海伊予灘に面しています。盆地に河川が流れているなどの地形から霧の発生が多く，秋から冬にかけてはその霧が肱川に沿って伊予灘へと流れでる「肱川あらし」がみられます。

伊予大洲藩六万石の城下町として栄えていたこともあり，歴史的な建造物や昔ながらの懐かしい街並みが随所に残っています。海，山，川が織り成す多彩な景観や「うかい」「いもたき」などの肱川を活用した観光名物もあり，季節の移ろいや人々の温もりを感じることができます。今回は大洲の代表的な観光場所でもある大洲城と臥龍山荘について紹介したいと思います。

肱川の河畔に望む大洲城は，元弘元（1331）年鎌倉時代末期に伊予国の守護宇都宮豊房によって築城された地蔵ヶ岳城が始まりといわれています。その後，戦国時代を経て，小早川隆景が伊予を平定した後，戸田勝隆，藤堂高虎，脇坂安治が相次いで城主となり，このころ４層４階の天守を中心とした本格的な近世城郭に整備されたのではないかと考えられています。明治維新後は，城内のほとんどの建築物が破却され，明治21（1888）年には，老朽化により，惜しくも天守は解体されましたが４棟の櫓（台所櫓，高欄櫓，苧綿櫓，三の丸南隅櫓）は解体をまぬがれ，いずれも国の重要文化財に指定されています。その後，地元住民の城郭への保護活動と，市民による寄付などによって平成16（2004）年に復元されました。４層４階の複連結式天守の復元にあたっては，明治時代の古写真や「天守雛形」と呼ばれる江戸期の木組み模型など豊富な資料を基に当時の姿が正確に復元されました。このように復元に必要な多くの資料が残っていることは大変稀なことであったとのことです。2020年からは１日１組限定でこの天守に宿泊できる「キャッスルステイ」がはじまり，１泊２日２名利用（朝食１回 夕食１回）で，110万円（２人，税込）と高額で

１うかいの様子　２復元された大洲城



3 臥龍山荘の庭園,右の建物は臥龍院　4 肱川から見た不老庵

すが城主気分を味わえるということで話題となっています。

臥龍山荘は肱川流域随一の景勝地“臥龍淵”に臨む3,000坪の山荘で，臥龍院・不老庵はそれぞれ数寄をこらした逸品揃いです。神楽山を背に，東南の冨士（とみす）・梁瀬の山々と肱川・如法寺河原の自然をとりいれた借景庭園は，自然と人工の典雅な調和をみせ，四季折々に違った顔を見せてくれます。この地を「臥龍」と命名したのは，大洲藩第３代藩主加藤泰恒が「蓬莱山が龍の臥す姿に似ている」ことから名付けたものと言われています。初めて庭園を築いたのは文禄年間まで遡り，この地は藤堂高虎の重臣，渡辺勘兵衛が広大な屋敷を構えていたところで，「勘兵衛屋敷」の名で呼ばれていました。その後，この地をこよなく愛した泰恒公は，吉野の桜と龍田の楓を移植し，庭園に一層の風情を加えたため，歴代藩主もここに遊賞しましたが，やがて手を入れられることもなくしだいに荒廃していきました。現在の臥龍山荘は，明治の貿易商河内寅次郎が明治31（1898）年頃この地を購入し，川に突き出している蓬莱山を含めて庭園とし，臥龍院や不老庵，知止庵を構想と設計に10年，築造に４年の歳月をかけて造られました。平成28年７月25日に国の重要文化財に指定されています。臥龍院は，松皮菱の花頭窓など，細部意匠を持つ茅葺屋根の建物で，数寄屋技法の濃淡により室毎の趣向に変化を持たせています。不老庵は，肱川を見下ろす崖地に懸け造りで張り出す，特異な造形になる茅葺の小庵です。不老庵から眺める肱川は特に美しく，移りゆく季節の彩りを感じることができます。

大洲市は伊予の小京都といわれるように肱川を中心に豊かな自然に恵まれ，そこに歴史的な建物や情緒ある街並みが残っています。食に関しても瀬戸内の海産物はもちろんのことアユやカジカなどの川魚，里芋や白菜などの野菜をはじめ栗なども名産品です。コロナが落ち着き，気兼ねなく旅行にいけるようになったら，愛媛にお越しの際は，大洲にも立ち寄ってみてください。

続いて東予地方から，自らもサクソフォンを演奏される，今治市の山本昌司先生（昭和54年卒）です。

全国的にも珍しい海城である今治城は，慶長７（1602）年藤堂高虎により築城開始され，慶長９（1604）年に完成しました。今治城完成以前の今治の支配拠点は，唐子山山頂にあった国府城でしたが，より能率的な都市経営を目指すため築城されました。構造は，三重の堀に海水を引き入れた特異な構造で，当時は海から堀へ直接船で入ることができるなど海上交通の要所今治らしく海を最大限に活用した城となっており，日本三大水城の一つに数えられています。このように今治は古来より海上の要衝として栄え，港を中心とした商業都市として，またタオル・縫製業，造船・舶用工業を基幹産業とする工業都市として発展してきました。現在，国際的にも有数の海事関連企業が集積する「海事都市今治」として歩みを進めています。

平成11（1999）年に完成した西瀬戸自動車道（瀬戸内しまなみ海道）において，その風光明媚な景色の中をウォーキングやサイクリングを楽しむ方々に人気となっています。

5 今治城

6 しまなみ海道の多島美　7 瀬戸内しまなみ海道・国際サイクリング大会
8 今治ジャズタウンプレイベントの様子。中央は山本先生　9 焼豚玉子飯

2014年には「瀬戸内しまなみ海道・国際サイクリング大会」が盛大に開催され，サイクリングの聖地として今も２年に一度開催されていて，2022年も開催予定です。

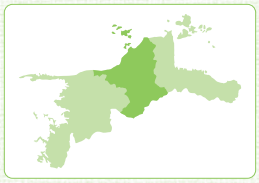
また，今では夏の風物詩となりました，今治市民のまつり「おんまく」と「今治ジャズタウン」も，町を活性化し魅力ある街づくりを目指した，市民力と行政が融合したイベントであります。「おんまく」とは，めちゃくちゃ・いっぱい・おもいっきりなどを表す言葉で，この夏まつりは，踊り，伝統，花火をメインイベントとしています。

1999年８月に，しまなみ海道の開通を記念して「今治ジャズタウン」が初めて開催されました。それ以来毎年「港町にはジャズが似合う…」をモットーに，ジャズを愛する一般市民が中心となり回を重ねています。「タウンステージ」では，今治市内のお店にミュージシャンが出向いて演奏し，ふだんJAZZをやらないようなお店でも身近に生演奏を楽しむことができます。

最大のイベントとなる「メインステージ」では，ミュージシャンが一堂に会するジャズコンサートを開催し，日本のトッププレーヤーがそれぞれのスタイルで華やかな演奏を繰り広げます。

今治はグルメの宝庫でもあります。愛媛みかんやゼリーのような食感の紅まどんな，西日本B-1グランプリで2017年に優勝した「焼豚玉子飯」，鉄板で焼いて甘タレで食べる「皮焼」を代表とする今治焼き鳥，せんざんき（唐揚げ），そして来島海峡で獲れる海鮮グルメ。鯛やアコウ（キジハタ）の刺身は絶品です。

温暖な気候で，食べる物も美味しく，とても居心地のいい場所です。一度今治を訪れ，ゆっくりと堪能していただきたいと思います。



最後は中予地方から県都松山市の矢野興一先生（昭和56年卒）です。東歯同窓会愛媛県支部の会長であり，松山観光の中心地，道後温泉本館から歩いて10分ほどの自宅兼診療所で仕事をされています。

愛媛の，普段はすこぶる温和な人々が，命をかけて興奮するのが年に一度の秋祭りです。どこから湧いて出たのか若者が揃いの法被を身にまとい，大頭取（銀行の頭取よりえらい？）の声一つで，１トン近くの神輿を担いで，ぶつけ合うのです。全国放送で紹介されるほど危険な祭りです。

この祭りは，道後の伊佐爾波（いさにわ）神社と湯（ゆ）神社という２つの神社の神域に８つの町があります。各々の町から大神輿を200～300人の若者が，町の法被を着て，道後温泉駅前に集結し，そこで各町２回ずつ別の町の神輿と「鉢合わせ」を行います。約10mの間隔を開け，横向きにした神輿を45度傾けて，ぶつけ合います。息を合わせて走る神輿もあれば，ジッとその場を動かず相手を受け止める神輿もあります。各々の神輿の作戦です。軽自動車１台分の重さがぶつかるのですから，交通事故のようなものです。いかに木でできているとはいえ，大きな衝撃です。約２万人の観客の中には目の不自由な方もいて「この音を聞かんと，１年が始まらん。」と言っていました。神輿守も打撲，骨折は当たり前，10年に１人くらいは神輿に挟まれて死人も出ます。葬式に参列して，遺族の「本人は本望だったと思います。」という言葉に涙したこともあります。その為に，会場脇には常時，救急医が１人では足らず，２人待機しています。

そんな危険な祭りの大頭取を平成７年より15年間勤めてきまし

10 鉢合わせ
11 持田神輿，
上に乗るのは
矢野先生

た。多くの若者を命がけで突っ込んで行かせる号令をかけるのです。びびったら怪我をします。逃げたら仲間が怪我をします。もしかしたら命を落とします。まるで戦争です。今の日本の平和ぼけした若者を「死んでも，仲間を守るんだ」という気持ちにさせるのです。今のところ，我が神輿は死人こそ出してはいませんが，手足の骨折，内臓損傷，その他，数えたらキリがありません。こんなこと本当にしていて良いのでしょうか？　それでも，祭りは終わりません。この２年間は，新型コロナの影響で中止になりましたが，来年には復活すると思います。今から胸が躍ります。でも，なんで私のような町医者ふぜいがこんな危険なことをやっているのでしょう。

私は心優しい男です。いつも嫁に怒られて，シュンとしている男です。実は知らなかったのです。こんな危険なことをする祭りだとは。今は県庁所在地の松山で開業していますが，生まれ育ちは，田舎の小さな村なのです。その村では村人すべてが顔見知りで，学校の行き帰りには，皆が声を掛けてくれるほどコミュニケーションのとれた地域でした。そんな村で育った私が，周囲に知人も同級生もいない都会の住宅地で開業して，まず，驚いたのが，隣近所の触れ合いのなさでした。そこで私は，「町を変えなくちゃ」と思ったのです。町内会へ行き，「祭りをしましょう。祭りをすれば隣近所が顔見知りになり，もっと温かい町になりますよ」と訴えたのです。しかし，全員に反対されました。100％否決です。「そんなの無理だ。できるわけがない」「誰が責任を取るんだ。そんな人間はこの町にはいない」「そんな金どこにあるんだ」等々…。私は仕事を６時に終わらせ，15分で食事を済ませ，町内約400の家を一軒，一軒「祭りをしようと思います。つきましては，寄付をください」と説明して廻りました。予想していたとはいえ，なかなか冷たい対応でした。「あんた誰？」「町内会長の名前を言ってみなさい」と小銭を投げつけられたこともありました。でも，少しずつ話を分かってくれる人が出てきて「矢野さん，この町で祭りをするの？　１人でやってるの？　私も手伝うよ」と言ってくれたのです。約半年後，すべての家を廻った頃には，信頼できる仲間が，30人程集まりました。しかし，この祭りは200から300人の人数が必要なのです。でも，そこからは人が人を呼び，１年後には神輿を挙げ，祭りに参加できる人数が集ったのです。

そうして，初めての，件の祭りに参加したのです。しかも，言い出しっぺの私が大頭取として多くの神輿守に担がれて，神輿の上に乗り，登場しました。写真では堂々としているように見えるかもしれませんが，足は震えていました。神輿の上は高いのです。また，観客２万人，他町の神輿守２千人の注目の的なのです。でも，仲間に「我々のトップなのだから，えらそうに乗っていてください」と言われ，私の祭り人生が始まりました。

あれから４半世紀，あんなに反対していた町の人々も「我が町の神輿」として誇りにし，応援してくれています。15年間大頭取をやり，その後８つの町すべての上に立つ副総代を５年間やり，テレビの実況中継の解説も２年やりました。もう，祭りでやり残したことはありません。でも，まだ今は，我が持田神輿の会長です。

いかがでしたか。愛媛の観光地といえば道後温泉がとても有名ですが，それだけではない魅力が少しわかっていただけましたか。海や山や川などの景色とグルメの他，良いところはまだまだ沢山あります。ぜひ一度お立ち寄りください。

以上愛媛県の“ふるさとじまん”でした。